体験的児童文学論
－事実と虚構のあいだで－

和田　登

1．いまの仕事を決めた原体験

こんばんは。和田でございます。

今日は標題のような内容で語りたいと思っていますが、はじめになぜ自分が児童文学などという世界の仕事をするようになったのか、そのあたりから語り起こし、劇映画にもなった小説「想い出のアン」を成立させていった過程をお話ししたいと存じております。

それは、とりも直さず、事実と虚構のあいだを語ることにもなります。

そこでさっそくですが、なぜいまこのような仕事についているようになったかを、つらつら振り返って考えたことを披露したいと思います。よく三ツ子の魂、百までといいますが、人間というものは、こども時代に体験したものを土台にして生きているいきものです。ヘルマン・ヘッセの言葉を借りれば、人は十三、四歳ごろまでに体験したものを糧として生きている、という言葉になります。これは彼の「ロスハルデ」（高橋健二訳「湖畔のアトリエ」）という作品の中にあります。その思いがよっぽど強かったとみえて、彼は殆どの作品をこども時代重視で描いています。それは晩年まで続きますが、このようにこども時代に注目していた作家は、彼に限りません。トルストイもそうですし、日本では島崎藤村、堀辰雄などもべつに相談したわけではないのに、似た意味のことを述べているんです。

それだけこども時代は、人生に影響を与えているということですね。

私に引き付けていえば、小学校、当時は国民学校ですけれども、一年生から三年生まで教わった先生の影響をぬきに、いまの自分の仕事について語れません。何しろ私の入学が太平洋戦争開戦の翌年であったにも拘わらず、先生、井口志げ乃先生は、毎日のようにアンデルセンとかグリム、日本神話や講談社の絵本など読んでくださったのです。軍国主義を強引に押し付けられたという印象がないのです。音楽といえば、音楽室で、「三匹の子豚」だの「国際急行列車」だのといったレコードをかけてくれた――。

文化的かおりの高い先生であったわけです。最近になって分かったことですが、井口先生はあの、松井須磨子の家と親戚の間柄だったんですね。

この女の先生によって私の心に文学、物語というものの面白さが芽生えたのです。したがって、恩人というしかありません。

以後、高学年になってからは、そんなに本を読みたかったなら"坊主"になれとまでいわれたほど、本の虫になっていました。そのように読む面白さを知ってしまった私は、大学生、信州大学教育学部に入ってからは、本格的に児童文学を書きたいという気持になり、仲間と同人誌を起こしたりして筆を執りはじめたのです。将来、教師になりたいという希望と、児童を対象とする文学の仕事とは、うまい具合いに整合性がありました。現場に出るようになってからは、教室でこどもたちに読んでやったりして、作品の質を確かめることもできたし、文学教育というかたちで、こどもたちと向かい合うこともできたのです。

そんなふうにして、何冊か書いていくうちに、「想い出のアン」を書くようになります。

2．自分に問う気持ちとこどもに伝える緊張感

この作品は、もとをただしていけば、マツシロの地下壕で働かされていた朝鮮人労働者の問題を調べていく延長線上に待っていた作品といえます。

私はいま、マツシロとだけいいましたが、その内容については、皆さん、もうマスコミなどで地元信州の人ならご存じだと思いますので、説明ははぶかせてもらいますが、ただ、なぜ私がその問題に向かい合うようになったかは、重要なことでありますので、きちんと語っておきたいと思います。

誰でもそうですが、仕事にはスランプとか、行き詰まりといった時期が訪れます。私は児童文学でSFの世界を開拓していくんだという当初強く思っていた時期がありました。

昭和三十年代のころは、筒井康隆、星新一、小松左京といった人達が盛んにSFの世界で活躍しはじめていました。そうした中で児童文学の人達は、SFには遅れをとっていました。よって可能性のある世界なのに、といった不満をもっていまして、それなら自分がその世界を開拓するんだという気負った気持ちがありました。そこで、たくさん書き始めていたので

すが、やっぱり才能がないせいで、いいものが出来ずにいました。それをみて、先輩は、「お前んのは、新しくて古いんだ」とか、宮口しづえさんという木曽で「ゲンと不動明王」など優れた現実的な作品を書いてすでに有名になっていた作家からは、「和田よ。お前、そんな空の高いところにばかりにのぼっていねえで、早く地上へ降りてこいよ」などと、皮肉たっぷりに忠告されていました。

ようするに、和田の書くものは、思いつきにすぎないんだと。私ははじめ、若気のいたりで、何いってるんだい、おれはおれの新しい分野を開拓してるんだぜ、と反発していたわけです。ところが、スランプに陥ったときになって、初めてその意味が分かったのですね。一口でいってしまえば思想がないということです。これは致命傷です。

私は、思想は現実をしっかりと見つめることから生まれるんだという認識にいたり、それならば、どうすればいいんだみたいな深刻な心境に追いやられました。そのあげく、現実をみつめるということは、自分がおかれている周囲の現実を自分のものとして受け止めるということ。さらには自分の生育歴をたてにたどっていくことによって、自己検証すること、というふうに考え後者の方が先だという思いが強くありましたので、記憶の遡行を試みたのです。そういう過程で、マツシロの工事の発破の音がよみがえってきてその方に心が引っ張られていったのでした。わが家から六、七キロしか離れていないところにマツシロはありました。

自分の生育歴云々より、その工事の実態調査へと心が向いていったのです。あの工事の本質は何であったのだろうかと。そのマツシロを歩いた記録を「悲しみの砦」という本にまとめましたが、それは戦争とか民族とかについて、自分に問うとともに、こどもたちに伝える緊張感のうえにたって書かれたノンフィクションといっていいでしょう。ノンフィクションというからには、ことわりなしに想像や推測で書くことはできません。事実をもって語らしめるものがノンフィクションであるからです。

最近は、柳田邦男や沢木耕太郎のように禁欲的なまでに私情や想像を排して書かれたドキュメンタリーやノンフィクションがあるかと思えば、かなりルーズな作品が市場に出回っているケースがあります。

さて、ノンフィクション論はともかく、私は次なる作品を書こうとした

とき、「悲しみの砦」では、ノンフィクションとして書いたために、自ずと限界がありました。このようなドラマが背景にあったらしいのに、それを断定的に書くことができない——。そういう欲求不満をもっていましたから、今度はフィクションでマツシロを書こうという算段がありました。けれど思いあぐねているうちに、どうも無理だという考えが強くなってきて、逡巡しておりました。そんなある日、書店へいって、郷土書コーナーの本を眺めているうちに、「軽井沢ものがたり」（幅北光著）だの「軽井沢開発ものがたり」（小林収著）といった書物が目にとまりました。

読んでいくうちに、太平洋戦争中に、軽井沢には開戦と同時におびただしい数の欧米人がそこに収容されたという事実が書かれていました。あのころは、アメリカなどでは、日本人が適性国人として収容所に入れられました。その裏返しのことがあったと、そのとき初めて知ったのです。これは私にとってショックでありました。

これを読んだとき、私は以前、西条倶吉の「カナダ館一九四一年」という中編小説のことを思いだしていました。これは信濃毎日新聞社の文化部にいた彼が、中央公論文学賞を獲得した作品です。内容は、信大教育学部前の聖救主教会がモデルでした。ある画家の少年時代を回想するかたちで書いていました。話はその教会に通う母に連れられてやってくる盗癖のある〝ぼく〟（小学生）とウメと呼ぶ女学生と親しく交流しながら、進んでいきます。そこの教会の牧師はコルベックさんというのですが、〝ぼく〟は牧師館の部屋からいつもの盗癖で、ある豆本を盗んでしまうのです。

その後、罪の意識にさい悩まされたすえに、本を返しにひとりでいきました。その日がちょうど十六年十二月八日、開戦の日で、すでにコルベックさんは官憲に捕らわれ軽井沢へ収容されてしまっていなかったという結末です。その最後のところだけは、苦になっていたものの、それ以上は考えないできてしまっていたのです。私の意識は、マツシロから少しずつ離陸して、それならば、軽井沢に収容されたその後のことをコルベックさんということから離れて書いてみようという気持になった。

だが、決定的に資料不足であります。そこで、好奇心もあって、軽井沢へ取材にいくことにしましたが、待てよと考えました。そのような収容の事実があったとしたならば、これまでに出た公的資料その他参考書類があ

るはずだと思い、調査してみました。

3．思いがけない記録の発見

私の頭には、それとともにマツシロをフィクションで書きたいという思いがあった当座でしたので、工事現場から逃亡した朝鮮人労働者のことが浮かんでは消え、浮かんでは消えていました。ある一家なりがそれをかくまい続け、敗戦にいたる筋書きみたいなものが漠然と浮かんでおりました。そのとき書店でみつけた本やら、コルベックさんが出てくる先にあげた小説の延長線上にそれを置いて考えたりしておりました。そして、その、かくまい続ける秘密を実行するのが、欧米人たちというのはどうだろう、とくに軽井沢に関係した――。そんな具合いに進んでおりまして、それにつけてももっと具体的な資料が欲しいということで、書斎にあった「長野県政史」第二巻をひらいて探しました。

ところが、戦時中の軽井沢の話は全然載っておらず、その代わりにおや？と引き付けられた文章が目にとまりました。それは何かといいますと、小布施の新生療養所の牧師さんの談話で、内容をかいつまんで紹介しますと、こんなふうのものです。

小布施には、昭和七年に創立した結核療養所があった。それはカナダ人のウオーラーさんという人が本国のキリスト教徒の援助のもとに創設されたものであったが、太平洋戦争がはじまると、キリスト教排斥運動の憂き目に遭い、大変な弾圧を受けた。教会を青少年の錬成道場に提供せよとか、国旗を建てていないじゃないか、十字架を即時降ろせとか、いうことをきかないと、配給米を停止するぞと脅すなど。

それに加えて、気に入らない医師がいる、彼を辞職させよといったものです。私はとくにこの医師の存在を知り、マツシロから抱いてきたテーマと繋がるような気がしまして、大いに考えさせられました。頭に先ほどから述べてきた逃亡朝鮮人とのからみで、この小布施を主舞台にして、軽井沢と結びながら長編ができないかと構想するようになったのです。

このように小布施が舞台となる予感がしましたので、小布施の療養所についてもっとよく知らなければならないと、現在は一般病院になっている病院の牧師さんに電話したのです。西洋式病院ですから、附属のチャペル

をもっていたのですね。正しくは聖救主教会の中部教区が経営していたのです。信大前の教会は小布施の療養所を建てたウオーラーさんが住んでいたところです。コルベックさんは、その人がモデルになっているといえます。

さて、電話を入れた日は、昭和五十二年の五月三日。応対してくださったのが、あの談話を載せていた牧師、豊岡陸郎さんの奥さんで、「主人はただいま留守でございます」という返事が返ってきました。その留守の理由というのが、初代所長のR・Kスタート先生が、カナダから療養所側の招待で久しぶりに本国からやってきたものの、羽田空港に降り立ったとたん、病死されてしまって、病院の主立った関係者はみんな上京してしまっているという騒ぎであったのです。

作品を思いついたそのときに、そうした事件に遭遇したということは、何かの暗合のようにさえ感じられて、いっそうこの作品をしっかりと書きたいという気持にさせました。そこで、せめてチャペルなどの風景だけでも目に入れて来ようと、幼かったこどもたちを連れて小布施へ参りました。松林に囲まれた病院の風景はじつに見事なものでした。チャペルは蔦に覆われて風情がありましたし、裏、つまり南になりますが、そちらに回ってみますと、松川の流れが清冽で、気持ちのよい風がふいていました。その帰りにふと思いついて、信大前の教会により、何か参考になるものはないかとそこの牧師さんに相談したところ、日本聖公会の「中部教区の歴史」という分厚い本をいただくことができました。

家に帰ってひらいてみますと、その新生療養所の概略にはじまり、ウオーラーその人がいかにして苦労を重ねてそれを建てたかが書かれていました。彼は二十七歳にして妻、スザンナさんとともにカナダから日本にやってきたのでした。はじめは福島県で布教をしていましたが、そのうちにまだ信越線が全通していない明治二十六年の暮れに善光寺の町に入ってきたのです。碓氷峠はまだ馬車鉄道で、客を引き上げていた、そんな時代です。長野で布教をはじめたはいいが、もともとこの町は仏都です。よって異教徒には不利な場所でありました。布教をしていると、石をぶつけられるわ、溝に突き落とされるわで、さんざんな目に遭うのですが、彼はそれを反対に深い愛の心で返していったのです。

そのあらわれのひとつが、日本では結核で苦しんでいる人々が大勢いる

と知って建てた療養所だったのです。そもそも日本にやってきた目的が、そうした人々の救済にあったのでした。

ウオーラーの日本への渡航には、キリスト教信仰にもとづく大いなる決心がありました。母親が、息子を引き留め、どうか行かないでおくれ、そうすれば、お前のすきなように教会を建ててあげるし、などとくどくのですが、彼の決心は固く、結局は日本へやってきてしまったのです。キリスト教には、アガペという献身とか、無償の愛とかといった観念がありますが、それにしたがったということになります。

4．軽井沢への取材

私の頭の中がだんだんにそれに関係した知識で満たされていく中で、もうひとつ不明確であったのが、戦時中の軽井沢の状況でした。そこで、その後、民宿に一泊しながら、当時のことを知る人達に話を聞いて歩きました。「軽井沢ものがたり」の幅北光さんや万平ホテルの支配人などです。

あのころは、官憲の見張りがきびしくて、外国人と日本人が接触してしゃべっているのが見つかっただけでも、尋問に合うような空気がありました。各国の人々が集まっている場所だけに、スパイをするには、もってこいの場所でもありました。それゆえに外国人収容の別荘の床下にもぐりこんで、警察が盗聴するようなことがしばしばだったようです。

軽井沢から帰ると、私は小布施の療養所で働いていたカナダ人たちが、開戦と同時に軽井沢へ収容されてしまう物語を構想しはじめました。やがて豊岡牧師から話をお聞きする機会に恵まれて、いかにカナダの人達が日本人の結核の治療に一生懸命だったか、それにたいして日本側の当局はいかに無理解であったばかりでなく、残酷なしうちをしたかを知ることができました。

その弾圧を、療養所側は黙って受け入れていたかというと、決してそうではなく、ぎりぎりまで抵抗した姿が浮かんでみえてきました。たとえば十字架を降ろせの命令には、「私たちの手では降ろすわけにはいきません。あなたがたが、自分の手で降ろすのであれば抵抗はしません」といった具合にです。結局は降ろすような事態にはならなかったし、青少年の錬成道場に、という申し入れも断ることができました。この豊岡さんについてい

えば、彼には招集礼状がきて、戦地へいってしまうのですが、「想い出のアン」では、居残っている牧師というかたちで物語を展開しています。もともと創作する側、作家は作品化するときには、創造主、神様の立場をつらぬくことになります。したがって、登場人物を殺すも生かすもその手にゆだねられているのです。そうしたことを、この物語の根幹部分についてあげるとなれば、ウオーラーさんはじめ、カナダ人のR・K・スタートさんという初代所長や他の職員たちが、開戦と同時に軽井沢に収容されたという事実はありませんでした。が残ってもらったのです。実際は、ウオーラーさん以外は、戦雲怪しくなってきたころには本国カナダに帰ってしまっていたのですが、それでは物語が成立しませんので、残ってもらったんです。

その職員の中で、かなり重要な人物に、ミス・パウルという婦長さんがいます。この人は厳格に患者への対し方をしましたし、大変人間的でもありましたので、今日でも元患者さんだった人達に慕われ続けてきました。私はこの人のことをくわしく書いた書物、「看護史の人々」というのを、平安堂の医学書コーナーでみつけ、あまりにも魅力的な人物であったがために、物語にあえて実名で登場させたほどです。

ところで、このように登場人物が浮かびあがってきますと、私の頭の中では勝手にそれらが騒ぎはじめます。そういう状態になってくるとしめたものです。この小説は、十字架をまもり通した人々の愛の絆の美しさのようなテーマになりそうな予感がしてきました。それならばいったい、誰が主人公なのか、という次なる問題が生じてきました。そこで、考えついたのが、主人公は日本人牧師の息子、〝ぼく〟。ヒロインとして所長の娘、アン——。という構想が浮かんできました。

青い目の少女と牧師のこども〝ぼく〟との友情から淡い恋へと発展していく姿を追いつつ戦時下の十字架を中心とした人々の愛の絆をえがくというふうに固まっていったのです。二人のこどもを中心にということは、児童文学ということが頭にありましたので、読者がそこに重ねて読んでくれればという思いがあったわけです。

5．バイオリンの登場

しかし、私は牧師の家庭で育ったわけでもありませんし、クリスチャンでもありません。よって、何らかの資料なり素材に頼らなければなりませんでした。牧師の家庭ということになりますと、ウオーラーよりも遅れて長野市に入ってきて布教をはじめたダニエル・ノルマンのことが思い出されました。彼の伝記を読んだこともあります。これは、息子、ハーバードが長野での生活をかなり細密に書いており、家庭内のこともよく書かれていました。それによったのですが、この創作にあたり、改めて読んでみて面白かったのは、家、といっても牧師館ですが、その家の構造的なことがらでした。

日本にキリスト教が入ってきてから、明治の時代というとだいぶ経っているわけですが、無理解な暴徒などに襲われたときにはどうしたらよいかと、その対処のために、からくりが造ってありました。ようするに隠れる場所などですね。地下室もありましたが、これは野菜などの貯蔵に使われていたようです。その地下室の存在から私は、当初から構想していた逃亡朝鮮人を匿うという行為の現実感をそこにもたせようとしました。

なお、ヒロインの少女は、ノルマンの伝記にあった写真をみて、姉妹のうちの可愛い姉グレースにしようというふうに思いつきもしました。

このノルマンの牧師館を、療養所のチャペルの隣に位置づけることにして、その配置図も書きました。物語が複雑になる場合には、よく地図を書きます。今回はその館をカナダ館と名付けました。

さて、私にはもうひとつ、モデルがあって、登場人物として出て欲しい人がいました。中野市在住だった小沢僖久二さんという、バイオリン制作者です。いまはすでに故人になられていますが、この物語を書こうとする以前に別のことで取材したことがありました。この人の人生はじつに数奇なので、話が横道にそれますが、語っておきましょう。

彼はこども時代から中野に育ちましたが、小学校高等科のときに、工作の時間にみんなで茶卓をつくった際に、素晴らしい彫刻をそれにほどこしたのですね。その腕前がただものではなかったものですから、先生が、「きみ、将来何になりたいか、一週間余裕をあたえるから考えて、報告しなさい」といった――。それで、彼が一週間たって、出した答えは、バイ

オリンを作ります、というものだったわけです。大正五年の生まれですから、当時にしみれば、かなり奇抜な発想であったわけです。そう答えた年齢が十三歳。もっと詳しくいえば、昭和四年のことになります。中山晋平の影響があったのでしょうか。同郷ですからね。

その彼の決心は動かず、青年になると、将来、日本のストラディーバリになるんだという思いがつのって、素材の木々をさがして山歩きをはじめ、炭焼きをしていた家の少女に恋したりするのですが、結ばれることもなく、十六年には満州へ兵隊として送られることになります。衛生兵としてですね。その旧満州の牡丹江で過ごしているときに、白系ロシア人で、ストラディーバリをもっている人に出会います。そこへ忍んでいき、憲兵に見つかれば大変なことになりますからね、夜に忍んでいってはその型紙をついにとらせてもらうことに成功したのです。

その後その型紙を秘密に胸にしまい、戦場をかけめぐった後、本国に生還してからというもの、それをもとに本格的なバイオリン制作を再開して素晴らしいバイオリン制作者となっていくんです。

私は「想い出のアン」を構想しはじめたときから、作品の底を流れる音楽をなんとなく想定しておりました。よって、アンはバイオリンを弾く少女であり、父親はストラディーバリをもっているような音楽家として考えるようになっていきました。医者で音楽家というのは、シュヴィツァーを引き合いにするまでもなく、ままあることです。小沢さんをどう扱うかについては、いろいろ考えた末、バイオリンの素材の木々を探しに山を歩いているさい、たまたまある発電所工事場から逃亡した朝鮮人を助けて、アンのお父さんのところに連れてきて、地下室にかくまってもらう——。こんな筋書きができました。

小沢さんが旧満州で知り合った白系ロシア人の役割を、アンの父親に負わせて両者の関係を密に設定しました。この小沢さんのことは、あるいは人生といった方がいいですが、これはのちに「星空のバイオリン」というノンフィクションにまとめて出版しました。

6．事実と虚構のあいだに

やがて、アン一家は、適性外国人というだけで、日本の真珠湾攻撃と同時に、軽井沢に強制収容されてしまいます。〝ぼく〟が長野の中学校に通っていたときでした。

この中学は、旧制長野中学校をモデルにしています。が、学校の内容などを知っていなければ、リアリティのあるものは書けません。何かいい資料がないものかと思っていたさい、以前買っておいた「二拍子の青春」という同校の記録があったことを思いつきました。それをよく読んでいくと、木曽の発電所工事に駆り出されて仕事をした記録がくわしく記されていました。その中に、中国人の強制労働の実態が記されていました。その人々と学生たちが交流する姿も描かれていて、民族と戦争を提起するにふさわしい内容にあふれていましたので、その中のエピソードを、〝ぼく〟にからませながら作品の中に取り入れ、テーマを浮き彫りにするよう努めました。

それとともに、軍事教練のときに、牧師のこどもであるがゆえに、教官から特別にもいじめられる話をもりこみました。天皇陛下とキリストとはどちらが偉いかという質問は、官憲が教会に乗り込んでくるときに発する決まり文句であったわけですが、それは即、〝ぼく〟の悩みであったわけです。

さて、物語はアン一家が収容されてしまったその日を劇的に描くため、学校から帰ってみたらアン一家はいなくなっていたというふうに工夫したわけですが、いくつかそういうスリリングな場面を設定したわけで、これは創作方法にかかわあることになりましょうか。

あれやこれやの思いつきで綴られた作品ですが、最後は読者にカタルシスをおぼえさせるものでなくてはなりません。映画ではアンは帰国の途中船の中で死んでしまったとされていますが、原作は戦敗と同時に小布施に戻ってきて〝ぼく〟と再会するのです。けれどアンの方が、女性だけに発達が早く、というより自立心が強く、やがては横浜のアメリカンスクールに旅だっていくことを〝ぼく〟に告げます。

そうして、その日がやってきた日。〝ぼく〟はアンを長野駅で見送り、そのやるせない気持ちを信大前の牧師館にいるワッツ牧師のところに寄り、告白します。牧師は、「方舟から一羽のハトが飛び立った。あのこはきっ

と、オリーブの葉をくわえて帰ってくるよ」と、なぐさめ、「さあ、学校へいきなさい」と出してやるところで終わります。ワッツ牧師は、ウオーラーがモデルなんです。

*

以上、長々と語ってきましたが、この作品は、事実と虚構のあいだをさ迷いながら描いたもので、それはちょうど、幾万のジグソーパズルのピースの穴を埋めていく作業にも似ています。ファンタジーのようなものであれば違いますが、事実をもとにしながら書いていく小説というものは、そういうものなのです。

この作品をひとりでも多くの方に読んでいただければありがたいです。

どうもご静聴ありがとうございました。(終)